

## 一球入魂



資生堂社長 魚谷 雅彦  
うおたに まさひこ

「一球入魂」というスポーツ新聞の文字を指し示し、その得意先卸店の社長は、「最近の君の仕事ぶりにこれを感じるよ」と言ってくれた。それは1979年4月10日に、いわゆる「江川事件」の影響で阪神に移籍した小林繁投手がジャイアンツ戦で強烈な気合で投げて勝利したことを讚える記事であった。

1977年に歯磨き剤などの消費財メーカーに就職し、大阪の営業所に配属になった。この会社を選んだ一番の理由は、海外留学派遣制度でアメリカのビジネススクールでMBAを取得し、将来この企業のグローバル人材として活躍したいと思ったからだ。就活パンフレットにもニューヨークの支社の写真がカッコ良く載っており、夢を膨らませて入社の日を迎えたのだ。新入社員は全員営業現場に配属する方針により、大阪で歯磨き・歯ブラシなどオーラルケア商品を歯科医院に販売する小さな部門でスタートした。ところが、海外への夢とは全く違う泥臭い地方の営業現場の現実が待っていた。先輩社員から「海外留学？あれは東京本社のエリート社員のためのものだ。大阪の現場からなんか、これまで誰一人合格した社員はいないよ」と聞かされショックを受けた。それでも毎週2回夜に英会話学校に通っていたが、気持ちは段々と落ち込んで、半年後には、このままこんな仕事をしていてどうなるのかと悩みは深くな

った。

思い余って上層部の人が大阪に来た時に時間をもらい、「もう辞めたい」と打ち明けた。きつと「甘いんだよ！」と大目玉を食らうだろうなと思っていたが、その方は、「自分の将来を真剣に悩むのはいいことだ」と話してくれ、心が解放された。「でも君はまだ本当に社会のことを理解しているというには少し早い。これから1年間脇目も振らず仕事に打ち込んでみてはどうか。それでも変わらなければ、私が責任持って相談に乗るよ」と続いた。この言葉に感激、納得した私は、得意先に訪問する時の「お世話になってます！」と言う声も大きくなり、積極的になることが出来た。面白いもので業績もグングン伸びた。そしてある日、得意先の社長室に呼ばれ、冒頭の「一球入魂」の仕事ぶりを誉められた。誰かは見えてくれていると、天にも昇る心持ちであった。

それから1年後には、社長面接を経て入社3年余りでのMBA派遣留学が認められた。そしてこの「一球入魂」「夢を持ちながらも足元のことに集中する」という教えは、今日までの人生の指針となり、資生堂でも日々忘れることがない。このお二人の言葉がなければ、今の自分はなかっただろう。今度は私が若者にこういう言葉をかける番だ。